### 第二十二章

#### ヒューマニズム

――時代からの亡命――

ジェイコブ・コールグ



ジョン・リーチ「資本家と労働者」『パンチ』(1843年7月29日号) 資本家は暖衣飽食の生活を送り、労働者は恐ろしい環境で労苦を強いられている。

## 第 節 荒廃した時代を証言する

無知、 活、 ニズムや静謐な感覚を古典の中に見出したからである。 ようになっていた。この失望感から逃れるべく、 彼は文筆生活の早い時期に、自分が観察している文明における 思い込んだこともあったが、実際に改革者だったことはない と彼には思えたからだ。ギッシングは若い頃に自分を改革者と かった。実際的な人間は貪欲で利己的で、理想主義者は無力だ を改善しようと改革者たちが努力してもギッシングは奮起しな 永久に関わっていく何の足掛かりも見出していなかった。不満、 活の詳細なパノラマを提示しているが、 案出された科学的・宗教的な通念の受容を拒んでいる。 混乱は、 る制度上の欠陥 市の貧困、 および短篇小説は、後期ヴィクトリア朝の英国における社会生 た世界の不正に立ち向かうと同時に、 ギッシングが一八八○年から一九○三年の間に執筆した長篇 ローマの文学に救いを求めた。近代社会にはないヒューマ 社会制度の欠陥 ギッシングは小説を通して十九世紀の生活の中に顕在して 不能表 その本質に深く根づいているため改善不可能だと思う 金銭欲、俗悪な志向の拡大、中産階級の抑圧的な生 正だけしか目に映らなかったために、 -という主題で占められた。このような状況 -例えば政治、経済、 不正を緩和するために 彼はこの雑多な領域に 宗教、 彼の小説は都 彼はギリシ 結婚におけ 彼の目 それで

> は改革を求めることではなく 他人が認めたがらないと彼には思える真実を証言すること 改革は無駄だと感じていた

であった。

的

時代人が祖国の発展を喜ぶときに、 とんど留意せず、民主主義が拡大する時代の中で、 科学的手法に疑念を抱き、それらによって人間的な資質が損な 代精神の構成要素のあるものには違和感を覚えた。 支持を、そしてボーア戦争が勃発すると戦争反対を表明し、宗 的なリアリズムを小説形態として採用した。彼はフェミニズム られる。社会主義者で実証主義者だった頃もある彼は、 抱いていたことから、彼は十九世紀的な精神の持ち主だと考え 方で、時代特有の信条に自身との共通点を見出した。真実につ 来るべき廃退の脅威以外には何も見出さなかった。 われ、戦争が推進されるのではないかと懸念した。 教問題については急進的だった。その一方で、十九世紀的な時 ンやモリスの審美的な理想主義に共感し、 いて唯物論的な考え方をしていたことや社会に対して責任感を 般大衆に委ねることに断固として反対した。また、 ギッシングは自分を荒廃した時代における余所者と見なす ギッシングは文化の衰退と 同時代の小説に特徴 進化論にほ 政治権力を 彼は科学や 多くの同 ラスキ

彼は、 最大幸福の原理 いう意見は奇抜すぎて、真面目に受け取られることは稀である。 ギッシングの小説がヴィクトリア朝の思潮形成に貢 般的な認識 を退け、 例えば人間の本質的な善や最大多数の 当時からすれば啓発的でなければ したと

な嗜好、 首尾一 活状況に加えて道徳心にも影響するため、 り上げられた独自の反応なのである。 見方は無慈悲な反応と大差ないこともあるが、それは彼の 者の二つの役割を担う可能性があると思ったからだ。 階級であると同時に無力な犠牲者として描いたのは、 と民主主義の両立を認めなかった。 ているかもしれないが、彼は貴族的な価値観の持ち主で、 るのに貧民 で慈悲深いと見なすこともできる。 考を好む人物」(Swinnerton 14)と描写している。 ぼんやりとしか感知できない世界よりも、 は、彼のことを「自分をじかに取り囲む環境の向こうにあって、 貫しているようにも見えない法則に従って、 初期のギッシング批評家であるフランク・スウィナトン 人生の不運から学んだ教訓、 (図①) に自活する力を与えたがらないのは矛盾し 貧困の邪悪さを強調して 彼が貧民層を犯罪性のある しかし、 古代への愛情をもとに作 むしろ自分自身の思 貧民が犯罪者と犠牲 彼の考えは寛大 ギッシングの 社会を分析 貧苦が生 )潔癖 貧困

観にとって同程度に有害だと考えた。 が人の性質を和らげ、 な迷信として嫌悪したが、 自己中心主義と物質主義の有害な表出と見なし、 る政策だと一般に考えられているが、 ける資本主義の精神であるピューリタニズムには、 資本主義の拡大と社会主義にありがちな産業の管理は相ば いたためである。 その可 それとほぼ同じ理 無神論の好戦性にも反発した。 能性を練磨するのに役立つと認識 彼はキリスト教を後進的 ギッシングはその両方を 由から、 彼は同時代に 人間的な価値 抑圧的な 宗教 反す



--図① ルーク・ファイルズ『救貧院臨時宿泊所の入所希 望者たち』(1874年)

惧に支えられた商業主義的な社会システムだったが、

愛する個人の自由と心の平静の確保に欠かせないことも認識

商業主義の否定と金銭の必要性の認識とが互いに調

していた。

0

種の関心が利己主義や非人道的行為と結びつくことを指摘して

が拡大することをよい徴候だと見なしたが、

ギッシングはこの

がらも啓発的な感化力があると認識していた。

当

時

の一般

心

人々は庶民の間で読み書き能力が広がって美術や音楽への関

いる。

彼が最も嫌ったのは、

貪欲さと物質的な不安定さへの危

金銭が

彼

は、 和することはあり得ない。それでも、この二つの見方は彼の信 たとえ気楽であっても奮闘に値する目標ではないという信 |雅に人間らしく生きる術を持たずに単に生存すること

の中心にあるように思える。

えられた印象である。……この印象を完全に忠実に伝えること は自身の内面的な不満を表現する人物が少なくとも一人は登場 的 者との不調和 学という範疇における科学にあたるものとして信用しなかった 八九八年)の中で、彼は「芸術家にとっての真実とは自分に与 独特だった。『チャールズ・ディケンズ論 て他の主題に向かうようになって数年後の一八九五年二月十 な貢献だと見なすようになった。貧困問題を扱った小説をやめ 物の取り上げ方を、 の文明と、 るものを創造しようとした。 小説の中でギッシングは単なる客観性ではなく―― な要素の排除を要求するものだが、 ものよりも彼独自の主題 社会小説家の果たすべき使命についてのギッシングの考えは その人物がたいてい主人公である。実際に、このような人 芸術家の唯一の存在意義である」(第四章)と断言した。 客観性の個人的かつ自己表明的な変異体で、 その時代の不運に見舞われた感受性の強い理想主義 を解明する鍵でもあった。 ギッシングは小説に対する自分の最も重要 ――十九世紀末期の冷淡で欲得ずく 最初の主題である貧困は、 通常ギッシングの小説に リアリズムは主観 批評的研究』(一 誠実と呼ばれ 客観性を文 貧困そ

1

会の特定の層に価値を付さずに、 場します」(Letters 5: 296) と書き送っている。 階層の人々を扱っています。 ある下層中産階級、そして上層中産階級の代表者が少しだけ登 力のある労働者階級、 堕落した下層中産階級、 堕落した労働者階級、 社会の各層に多様な道徳的 ギッシングは 向上心と能力 向上心と能

社

値があることを示唆している。

精神を持っている。彼らの存在が示唆するのは、 由なく生きている人々と通常なら結びつけられる感性と寛容な ジュリアン・カスティ、アイダ・スター、そして『ネザー・ワ 『無階級の人々』(一八八四年)のオズモンド・ウェイマー 出した。スラム街を舞台とする小説の最も重要な人物たち シングは共感を呼ぶ主題と社会的な洞察力とを求める好機を見 に据えられている。このような自分の片割れたちの中に、 中で優れた感覚を保持している、そんな疎外された男女が中心 会配置が人々を本来は属していない環境に置き、 た人間的資質を育成するということではなく、 『暁の労働者たち』(一八八○年)のアーサー・ゴールディング、 ルド』(一八八九年)のシドニー・カークウッド 貧民があふれる都会の小説でさえ、 産業文明の陰鬱な活力 近代の異常な社 異常な結果を 貧困が卓越し -は、不自

考え、 失われ、 ギッシングは人生の大半を貧困の中で過ごし、 貧困を恐れた。 家庭教師をして無為な時間を過ごさねばならなくなる 金銭がなくなることによって心の平静は 貧困につい

生み出し得るということである。

H

彼は友人のモーリー・ロバーツに「私の小説は様々な社会

化されるという不可知論的な認識を持ち続けた。 的 銭の恐ろしい力と、マルクスが金銭の特徴と見なした呪物崇拝 ようである。その結果、彼はバルザックの小説で表現される金 辱と無力な怒りが徐々に蓄積する、 クスと同様に、理に合わない経済システムが人間によって神格 いう思いに囚われて、 知っていた。 ィン・リアドンと同様に、ギッシングは救貧院で死ぬことにつ た。『三文文士』(一八九一年)に登場する売れない作家エドウ な状況を解消するための経済的な世知を獲得しようとしなかっ な特質をある程度理解するようになった。 て病的な恐怖感を抱いていた。「彼は貧困の意味するものを 世人の利己主義と無関心。貧困! 貧困!」(第五章) 頭と心臓が冷えきり、 ギッシング自身が相当な時間を過ごした どうしようもなく恐ろしい 両手の力が失せ、 ギッシングはマル 恐怖と屈 と

という皮肉な事実について思案して然るべきなのに、

このよう

餓死寸前にある人々の哀愁を帯びた喜びや愛情の鬱々とした描響を力強く描写している。彼は貧民に対して感傷的ではないが、で的なユーモアを、そして尊敬に値する貧民の無邪気な満足感の中に家庭的な魅力を見出すこともできる。さらには、経済的の中に家庭的な魅力を見出すこともできる。さらには、経済的な危機に直面した労働者の無力さや欠乏が家族生活に及ぼす影な危機に直面した労働者の無力さや欠乏が家族生活に及ぼす影な危機に直面した労働者の無力さや欠乏が家族生活に及ぼす影響を力強く描写している。彼は貧民に対して矛盾した感情を抱いていたためギッシングは貧民に対して矛盾した感情を抱いていたためギッシングは貧民に対して矛盾した感情を抱いていたため

幻滅させた貧民を決して許さなかったことを察するであろう。 喧嘩といった悪意に満ちた描写を読んで、 読者は、休日を無為に過ごす群集、 詩的な魂だけが感知できるものなのよ」(第二十一章)と叫ぶ 想化する友人の計画を耳にして、「それは違う! とが判明した。『民衆』(一八八六年)のヒロインは、 うと、ギッシングは愚考していたのだが、 が彼らの人間性を変質させ、彼らから自制心と想像力を奪 を見出すだろうと期待していたが、 ステムによって搾取されていることを認識していた。 えているとあなたは言うけど、その苦しみは運命と闘っている たが言うような感情を持っていない。あの人たちは苦しみに耐 の精神には、彼が価値を置いたものを受け容れる余地のないこ なりたがり、規律正しい生活や洗練された楽しみを求めるだろ なった。すべての貧民は機会さえ与えられれば芸術家や学者に 冷淡さと獣性に対して無感覚にしたのだと結論せざるを得なく ンに来てスラム街で生活を始めたとき、 ッシングは貧民に対して敵意を抱くようになった。 て完全に責を負うべきでないことと、 いし、同時にギッシングは、 物悲しく詩的な雰囲気を漂わせる。 貧民がその嗜好や感受性に 家庭の混乱、 窮乏の重圧と限られた経験 隣人の間に素朴な美徳 彼らが制御不可能なシ ギッシングが自分を 貧困に培われた彼ら しかし、 通りで起きた 貧民はあな 彼はロンド 最終的にギ 貧民が社 貧民を理

って狂気に追い込まれた人物、

泥棒、

娼婦に正面から接すると

彼が飲酒や窮乏によ

会的な不正の犠牲者であるという認識は、

0) この小説はその意図に完全に沿うものではなかった。この小説 彼女の苦難の明白な証拠を見た。彼は次の小説『ネザー・ワー その死体を拝みに行ったギッシングは、むさ苦しい部屋の中に を得なくなっていた。一八八八年に彼女は赤貧の中で死に絶え、 生活に戻ってしまったために、ギッシングは彼女と別居せざる た。この結びつきは数年後にさらに明確になる。ネルが娼婦の ングの妻キャリーとして登場するギッシングの最初 表現すると同時に、その苦難を軽減するすべての試みや彼自身 ルド』において、このような惨状を黙許する社会を糾弾したが、 苦境が、社会の病状と不正とを彼の心の中でしっかり結びつけ きに最も力強く描出される。『暁の労働者たち』にゴー 異議申し立てでさえ、不条理な体系では無益であることを示 貧困が引き起こした苦難を、彼のどの小説よりも効果的に 0 妻ネル ル デ *゚*ィ 0

ている。登場人物の一人、デキウスはローマの通りで貧民の一 さえ、たとえ社会問題を扱っていなくても、貧民に一瞥を投じ 団と遭遇し、 中で副次的だが確かな重要性を保持することになった。 忘れたわけではなく、貧困は中産階級の生活についての小説 ッシングがしたのと同じような反応をする。 マに関する未完の歴史小説『ヴェラニルダ』(一九〇四年) .けた。とはいえ、彼が貧困そのものや貧困に対する恐怖心を 『ネザー・ワールド』執筆後、ギッシングは他の主題に目 彼らが食糧不足に不平を言うのを聞き、 晩年にギ 古代口 で 0 を

しているのである。

りも彼が恐れたのは、 人々に食料が与えられないなんて腹立たしかった。だが、何よ 苦難を目にするのは痛々しく、卑俗な叫びは耳障りだった。 マ帝国は幾多の時代に渡って民を潤してきたのに、これらの 騒動、 混乱、暴力だった。

1

ない。 まで緩められなかった。遺跡の中で生命を持つのは、 られ、彼の「先を急ぐ足取りは無数の遺跡の中に再び紛れ込む ちたいという欲求を主とする反応において副次的な要素にすぎ 典文学へ退却したのと軌を一にしている。 の逃走は、ギッシングが社会問題から書斎、 らうヤギと素早く走るトカゲだけである」と記されている。こ 社会の不正を憎む気持ちは確かにあるが、これは心の平静を保 ゆえに、潔癖なデキウスは都市の喧騒から完全に追いや すなわち愛する古 若芽を食

# 第二節 教育はあるが金のない若者

ている。ギッシングの主要人物は孤立しているので苦難や屈辱 六年)の序文で主張した、状況を反映する意識の条件を満たし り、ヘンリー・ジェイムズが『カサマシマ公爵夫人』(一八八 にさらされるが、 た英国小説への貢献だが、それは社会批判の理想的な媒体であ 教育はあるが金のない若者の描写はギッシングだけがなし得 因襲的な考えに煩わされない知識人なので自

性蔑視、 0) 映し出すのに使用されている。 物語は、 扱うギッシングの初期小説の中で、この種の若い男女の人生 文学の卑俗化に遭遇することになる。 にくい社会的混乱、 た小説においてである。そこで彼らは中産階級における捉え 器として各々の問題にぶつかるのは、 階級の壁、 貧困、 無知、 ジャーナリズムの品位の低下、 すなわち貪欲、 飲酒、 道徳的堕落という社会的な混乱を しかし、このような人物が知覚 偽善、 一八八九年以降に書か 抑圧、 結婚問題、 政治、 芸術、 女 0

分の経験を適切に評価することができる。

スラム街

(図 ②)

を



図② ロンドンのスラム街、ケンジントンのマークット・コート (1860年代後半)。

する ない。 年)における赤ん坊の両親は裕福であり、 ちに身につけた感情的な性向に従い、 が赤ん坊の死という最も耐えがたい不正の原因になり得ること する悪であって、ギッシングはどちらの階級においても、 働くお針子は薄給のために夜になると娼婦として働かざるを得 物を徹底的に搾取しようとする地代取立人に虐げられ、 る。 明白な影響を表現し、 よって引き起こされたわけではないが、 ために、家事や子育てについて何も知らない。『渦』 若い母親は、飲んだくれの母親によって貧困の中で育てられた させているため、稼ぎがほとんどない。 けていたが、安価な大量生産品が彼の技術に対する需要を減少 重なって作用した結果である。父親は熟練工としての教育を受 病院に連れて行く病気の赤ん坊は、 を示唆している。 を発する一連の出来事の山場になっている。 えていくのに苛立ち、 ギッシングの初期小説は経済競争がスラム街の生活に及ぼす 例えば しかし、経済競争は貧民のみならず金持ちの間にも蔓延 -ギッシングが詳述しているように、 『無階級の人々』において、 『ネザー・ワールド』 原因と結果を情け容赦なく関連づけて 居酒屋に入り浸り、 医者の診察を待たずに死亡 扶養しきれない家族が増 その死が金銭問題に端 の中で、 登場人物は彼らの所有 彼はスラム街で育つう 赤ん坊の死は窮乏に 犯罪に手を染める。 豊かな資本家が不 経済的な諸要素が 貧しい母親が (一八九七 工場で それ

女主人公のアル

倫を黙認させるために、

愛人の夫である商人に対して融資を由

し出る。その資本家殺害の原因になるのが、

ぐに死亡する。子供の父親が最初に考えたのは、死んだ娘は人のトラブルに悩まされながら女の子を産むが、病弱な子供はす妻と見間違え、資本家を殺してしまう。アルマはこの事件や他マ・ロルフである。嫉妬した商人が資本家の家にいたアルマを

一の苦痛を免れて幸福だということであった。

四章)ということである。

条件を持ち出すことによって、破滅的な結果を招く。条件を持ち出すことによって、破滅的な結果を招く。集合が中産階級に設定されている場合、経済的な動機はよりが攻撃されることになる。『人生の夜明け』(一八八八年)におが攻撃されることになる。『人生の夜明け』(一八八八年)におが、無慈悲で貪欲な性質に加え、美や洗練に対してある程度だが、無慈悲で貪欲な性質に加え、美や洗練に対してある程度がが、無慈悲で貪欲な性質に加え、美や洗練に対してある程度が、無慈悲で貪欲な性質に加え、美や洗練に対してある程度が、無益ないなら、とないなら、という人物に特が、無益が中産階級に設定されている場合、経済的な動機はよりの感性を持ち出すことによって、破滅的な結果を招く。

害される者の呻きが混在する轟音として彼の耳に届く。 業させるために尽力せねばならないことだ。 ねばならないこと、 の人物が学ぶのは、極貧の客であっても売り物の全額を請求せ いて、ギッシングは寛大な事業家が財政的な不運に見舞われて 餓との闘いで発せられる轟音、そして迫害する者の 最後の完成作『ウィル・ウォーバートン』(一九〇五年) 否応なしに雑貨屋の店員になる様子を描いてい 家族が困窮している競争相手であっても失 ロンドンの喧 叫びと迫 彼が考 . る。 にお 温騒は ح

程度に異質なものに見えた。この点で彼の小説はヘンリー・メ

た社会研究者の業績と共通している。

しかし、

貧困の現実を描

イヒュー、

チャールズ・ブース、

ベアトリス・ウェッブとい

けて、このような世界に甘んじて生きられるのか?」(第二十彼は心の中で叫んだ――どうすれば人は正気と慈悲心の名にか扶養している母や妹はどうなるのだろうか、「どうすれば――えるのは、自分は生き残れるのか、自分が生き残れなかったら

水晶宮に行った。小説中の彼の描写は、 街の人々の習慣や思考は、 にして人を犯罪、 づいていなかった現状に注意を喚起し、 ウェルといった場所を訪れ、銀行休日に労働者団 な努力をした。彼はホワイトチャペル、ランベス、クラーケン 小説中のスラム街の生活に信憑性を付与するために、 あげているのかもしれない。 のに役立った。多くの読者にとって、 の責任を感じて道徳的な抑圧感に苛まれている。ギッシングは してしまった人々から搾取されるか、 仕事をするために才能の放棄を強要されるか、 かかる。彼らは困窮した扶養家族を背負わされるか、 の高い人物は、彼らが監禁されているスラム街から同じ叫びを ギッシングが描く思慮深い若者で、 飲酒、 売春に駆り立てるのかを明らかにする アフリカのブッシュマンのそれと同 貧困は様々なやり方で彼らに降 周 ギッシングが描くスラム 遠くの理想を見つめる志 スラム街の生活がいか 、囲の苦難に対する自ら 読者の多くが未だ気 困窮ゆえに堕落 |体と一緒に 社会学的 不満足

が、

を見渡し、そこの顕著な特徴に正確な注釈をつけながら、

醜悪

|屈従という二つのメッセージを読み取っている。

アメリカ原住民の遺跡を覆い隠した群葉の中に、

自然界に ーウィン

ギッシングの小説には、 人間の必要や欲望とは無関係の経済が支配的な役割を果たして に孤立することはあり得ないという事実 力にするという事実 本位の動機が生活のあらゆる側面に浸透し、 を左右するという不気味な事実 るという絶望的な確信が見出せるのである。 他の環境におけるのと同様に、 道徳的にも実利的にも社会階級が互い 人間によって築かれたはずの社会で、 日 商業的な文明に 々の経験が心理的な発達 寛容さや善意を無 を立証している。 おいて営利

> 同 粗

ている。 威 ŋ ない透明な視野を通して、都市がいかにして人々から活力を搾 預言者の一人であり、都市生活の描写を堕落の図像として用い ムソン、 化している。 かを観察した。ギッシングは貧しい界隈の通り、 取り、 (運動へ注ぎ込み、人々を見分けのつかない原子に変えていく 描写を通して、 ギッシングは、 その活力を産業や街路の喧 彼は、 T・S・エリオットのように近代都市における偉大な 彼はディケンズ、ボードレール、 進歩の概念や大量生産の必要性に曇らされてい 人間が巨大で冷酷な力に服従する様子を視覚 ロンドンやその住人の生活についての数多く 騒という強大で悪魔的な示 ジェイムズ・ト 家々、 歩行者

> ラム街 競争の証拠を見出した。 おける生存競争の証拠を見出したように、 むさ苦しい店、 の描写の中で次のように述べている。 労苦、 彼は 悪臭の中に、 『ネザー・ ワー 自然界と類似した生存 ギッシングはスラム ル ド』におけるス

が

獲得できる洞察力にも富んでいる。

たギッシングの小説は、

彼のように想像力のある観察者だけ

それらは貧困生活にお

街

あ

て思い だけが食料にありつく。 て、 ・斐のない嘆き、 :士で闘い、 造りの建物は、 のたうちまわる様子を。 描いてみよ。 等級が等級に対抗し、 望みのない望み、 実際には産業主義の軍隊の宿舎である。 不気味な壁の中で、 夜中にそこを通ったら想像力を働かせ 人が人に対抗する。 粉砕された幸福が一体とな 人間の疲労感、 第三十章 生存者 獣性

0

IJ ] 不満、 うな石壁に閉じ込められている。 見える。 空間まで人物を追っていく。 沿って拡大し、人々の生活を荒廃させている。 広がる威圧的な力は疫病に似ている。それは経済活動の を得ず、 気で膨らみ、 大する様子をパノラマ的な描写を通して表現し、 ディケンズが看破したように、 ・を連想させる。 苛立ちは、 クレアラ・ヒューイットはスラム街の一 街路 彼らが住む家と同じように腐朽しつつあるように や隣室の悲惨な物音に悩まされながら、 ボードレールのパリについての詩のイメジャ 『ネザー ・ワールド』で人々の着る服は湿 その際に彼が大写しにする退屈 ギッシングの感覚では、 『サーザ』(一八八七年) 彼はその 室に住まざる 個人的な生活 牢 -獄のよ 力が拡 道筋 都会に の

おける都市はハーディの自然に相当する。ギッシングの都市も 好きな本も読めないことについて考える。ギッシングの小説に 人生について、 敵対している力を具現したものであるからだ。 1 バート・グレイルは、 ・ディの自然も、 そして朝五時に起きて夜七時まで働けば疲労で 人間的な価値観に対して冷淡か、 工場労働者として見込みのない自分の あるいは

## ジョージ・エリオッ ŀ の影響

うこと―

-を選択したのである。

初期の数作は『ドンビー父子』(一八四六~四八年)や とがある。 その見解のいくらかをエドマンド・ウィルソンが「ディケンズ 紀的な意識との最も重要な接点が小説技法の中にあるという事 人間に力点を置きながら、 (一八五二~五三年) と同様に、パノラマの広い情景を提示して していることは否めない。『暁の労働者たち』をはじめとする たと言ってよい。彼はディケンズに関する卓越した批評書 実を曖昧にすべきではない。小説という形式を用いることによ |雑な時代の人間性を描出している。 ギッシングが社会問題に専心したからと言って、 -二人のスクルージ」という評論(一九四一年)で使用した を著しているので、ディケンズ的な小説家と見なされるこ ギッシングはヴィクトリア朝の精神と意義深い対話をし また、その小説観がディケンズのそれとかなり共通 何か決定的な描写のようなものを成 これらの小説は、 彼と十九世 『荒涼館 卑賤な

> が、自分の作品には別の動機 忠実さを犠牲にするディケンズの傾向をギッシングは容認した 読者を楽しませ、道徳的な見解を普及させるために、 ズのユーモア、シンボリズム、メロドラマを模倣しなくなった。 社会意識が小説技法、すなわち題材の選び方や構成を左右して ギャスケル、シャーロット・ブロンテの数作の場合のように、 図を見せてくれる。ディケンズの場合、そしてディズレーリ、 いる。ギッシングは初期に数回試みて失敗したのち、 なる社会レベルを比較したりすることで、 し遂げるために、多種多様なプロットを対比的に用いたり、 自身の現実認識に忠っ 層をなす社会の 事実への ディケン 異 面

社会習慣や心理状態の十分な分析によって発見される原因と結 が含まれている。その態度にはまた、 験に基づく手段と唯物的な基準によって立証されるという信念 彼は、無作為のリアリズムや人物と出来事の網羅的な処理の ディケンズではなく、 リジ・ の手法を採用した。 方という、彼女が確立させて十九世紀後半に優勢となった小説 態度の中には、極めて重要な真実は観察によって理解され、 それゆえ、駆出しの小説家ギッシングが師として仰いだのは エリオットのリアリズムは、 の連結を通して決定されることが含意されている。 彼はそれに関連した態度も模倣したが、 ジョージ・エリオット ギッシングが彼女と共有し 出来事は原因と結果 (図③) であった。 そ 仕

0

た不可知論を反映して、

絶対的な真実ではなく実際の経験のみ



図(3) ポール・アドルフ・ ージ・ ジョン エリオ (1865年)

からなる知識を求めている。それは、 自伝的な要素、 直接的な

素材を選択する際の無意識的な性癖による作家の個性

0

的

対話、 表出を妨げるものではない。このリアリズムは物理的な現実な と品行に関する一般的な考えが脅かされるときに生じ、 て安定した社会の情景を叙述するのに適していた。 感じる に発展させる-倣しようとしたのは、 というよりも、 しに成り立ち得ないが、最も強調されているのは現実そのもの る社会状況が堅固であればあるほど影響力を増すものだ。 特に初期小説の中でギッシングがジョージ・エリオットを模 人物分析、 ―ことであった。この方法は規範や生活習慣が確立し 人物の現実に対する反応を表現することである。 伝記的背景、全般的な状況を積極的かつ広範 そのために現代の読者は彼女の小説を厄介に 小説の素材を徹底活用すること、 葛藤は道徳 想定さ 描写、

> は詳細に描写されることによって、 験させられる。これらの事物は、 て雄弁に語るのである。 下宿に引っ越さざるを得なくなるとき、 味を形成している。 素と同様に、主要な人物と出来事からなる中心部の周辺に置 魔法の泉、泉にまつわる伝説、 況の中で起きる。 八八六年) いるという印象は消失し、正確に描写する作者の技巧が、 入れる前にキングコートに同行して、 『リアリズムという目的に使用される。 それらがバラバラであれば持ち得なかったはずの重要な意 である。この小説では出来事の大半が落ち着いた状 読者はプロットの最初のエピソードを視界に しかし、 キングコートがロンドンの貧しい 愛想のよい牧師との出会いを経 小説中の他の二義的な構成要 自らが置かれた状況につい 踊るクマ、盗まれた財布 次の例のように、 社会生活が整然として 事物

掛けてある。 どなかった。 ても小さく、 そこに沈み込んだ。 外にある蝋燭の光を頼りに窓の前にあるソファーを認めると、 るドアが開け放たれた部屋に入った。 彼は蝋燭の火を点したまま階段の下に置き、そのすぐ左手にあ 下宿屋全体が魚を揚げる臭いで満たされた。 四脚の椅子が置かれているために、 ソファーと丸テーブル、 ソファー・カバーはあちらこちらが擦り切れ、 テーブル ジューッという音が階段の下から聞こえる の上にはかなり染みの 上部に装飾を施された戸 暖炉の火に勢いはなく、 歩き回る余地がほとん つい ……部屋はと た緑色の布

技法を彼が用いているのは

『イザベル・クラレンドン』(一

ジョージ・エリオットの影響は、ギッシングの精巧なプロッに対する声にならない叫びを効果的に表現したのである。に対する声にならない叫びを効果的に表現したのである。て、日常生活の本質的な首尾一貫性と連続性を証明したが、ギジョージ・エリオットはよく観察された詳細を辛抱強く集積し

文脈の中で判断されることになる これらの特質は、 リズムが物語に加わる。ジョージ・エリオットの作品において、 着実な進展において明らかである。 トにも見られる。彼は作品構造にかなり配慮した。このことは いう確信を反映している。これらが一つになって文脈が形成さ 物と筋の運びの依存関係が維持され、 出来のよい小説には決め手となるような事件が比較的ないの 念に準備し、その経緯を偶然性にほとんど依存させていない。 ットの連鎖、 ピソードの注意深い配置、 この手際のよさによって写実的な雰囲気が高まり、 登場人物による行動の選択が道徳的であるかどうか、その 出来事は概してそれらに先立つ状況によって説明がつくと 初期の数作を除く全部の小説に見られる出来事の 万物の確かな因果関係、 中心的な筋の運びと付加的なプロ 彼は話の展開を前もって入 日常生活の緩慢で着実な 社会構造の分かり易 登場人

ない。それは運命論という(ジョージ・エリオットの場合とは異しかし、そうした確実性がギッシングのプロットには見出せ

を口論、

別離、

貧困、

病、

死へと誘導するのは過酷で厳しい

寄せていることによってプロットの題材が供給されるが、

友| において、夫の稼ぎが低下していることと妻が夫に高い期待を に彼の運命論が包含されていることである。 論を欺くというクウォリアの意図、 敗北させようとする。 るが、女性のかつての婚姻関係が頓挫しているため法的に結 根は道徳的な男女の物語である。 破滅をもたらす。 なった) 況下で起きたことが必然だったことを皮肉にも示唆している。 法規の必要性がやっと分ったと述べるが、この言葉は所定の状 に通じている。すべてが終わった後にクウォリアは、 ォリアに対する悪意、 を及ぼすには至らないものの、 ロンドンに送り込んで彼女の重婚罪を暴露させ、 実な友― ので、彼らはフランスで結婚したふりをする。 れることがない。クウォリアが国会議員に立候補を望んでいる トの中で、人物の弱さと外的要因の持つ邪悪な力が結びつい ギッシングの特徴は社会的文脈に見られる特定の決定因の中 結婚制度の厳格さ、 -がクウォリア夫人の法的な夫と偶然に出会い、 含みが彼の決定論にはあるからだ。 ―結婚生活と立候補に関してクウォリアを妬んでいる 『デンジル・クウォリア』(一八九二年) は 法的な夫に邪魔をさせることになった偶 法的な夫は登場が遅く、 以上のすべてが平行して最終的な破滅 夫人は自殺に追い込まれる。 二人は夫婦として生活してい その妻の弱点、友人のクウ 例えば『三文文士』 運命論的 クウォリアの 投票結果に影響 クウォリアを 社会的 その夫を なプ D 世

存競争である。『余計者の女たち』(一八九三年)において、ほ存競争である。『余計者の女たち』(一八九三年)において、名表によって従順であることを強要され、虐待される。社会的な実によって従順であることを強要され、虐待される。社会的な知れると家から追い出されて産褥で亡くなる。この終局は当初知れると家から追い出されて産褥で亡くなる。この終局は当初の状況とその状況を作り出した女性差別に内在していたと考えるべきである。『余計者の女たち』(一八九三年)において、ほ

作者はカメラや録音機の代わりにすぎないという含みがある。 すなわち自己表出を禁じる平等主義的なリアリズムに賛同しな 称するギッシングは、 関して公平な態度を持とうとしたが、 現される信念を共有しなかったからである。ゾラとは違って彼 てきたリアリズムの流れに抵抗した。 かった。 るというゾラの理論を受け容れなかった。ギッシングは芸術に は科学的手法を信頼しなかったし、その手法を小説に転用でき アリズムの原則と想像力の恩恵がこのように矛盾したとき フローベールの無慈悲で公平無私の人生観の基礎にある態度 ギッシングは一八八○年代にヨーロッパ大陸から英国に渡 を自分の芸術に対して取り続けなかった。 自然主義の手法には、 表面的な観察に終始して解釈を禁じる、 個性的な表現は違法であって、 宗教に似た禁欲的態度 彼がその流れによって具 知的な貴族を自 0

> 風俗描写の手法をスラム街の生活から取った題材に適用したこ が喚起する反感や憤りは、 に似ているかもしれない。 期小説における貧困の場面のいくつかは、ゾラの場合と表面 フランスのリアリストとの共通点が多かった。 主義者よりも、バルザックやフローベールといった一世代前 で彼は、ゾラやジョージ・ムア(図④)といった同時代の自然 ることであって、無二の感性と特殊な知覚を持つ者が社会生活 き放つこと、すなわち因襲的な縛りをほどいて想像力を解放 彼のリアリズムは作者の感情を消し去るのではなく、 いうよりも、 の様々な事実に出くわして啓示を受けた結果なのだ。この意味 かったし、作品が自分自身の特徴を記したものだと思っていた。 おける客観性の価値あるいは可能性について幻想を抱いていな むしろ彼がジョージ・エリオットの実直で詳細な ギッシングがゾラを模倣した結果と しかし、 精読すると、 ギッシングの それらの場 それを解 面 初 的



図④ エドゥアール・マネ 『ジョージ・ムア』 (1878年)

ギッシングは自分の取るべき立場が分かっていた。彼は小説に

第四節

ペシミズムの希望

# とに起因していることが解かる。

析を擁護し、「人が考え感じることは、その人の行為の歴史で しれない。ジェイムズは「小説の技法」(一八八四年)で人物分 シングはヴィクトリア朝の小説の主要な様式の一つを共有して ように、ほとんどのギッシング小説の前景は、 質では夫の信条を共有できないことである。『民衆』 結婚し、夫の見解を受け容れる。だが、彼女が最後に気づかさ に満ちた育ちのよい女性が下層階級出身の社会主義の指導者と とにつながり、運命を決するような思考の繊細な動きとの、 才能を持って生まれたわけではなかったが、卓越した能力 れらの問題の調整をすることにある場合が多い。もちろんギッ の主要な関心は、 れるのは、 を発揮した最初の成功例は『民衆』である。この小説で、 方を描写する力-真摯な人間の心の惑いと、意見の根本的な変更や精神的な再生 期 感情に関する問題に対処する人物によって占められる。 性格の表れである」と述べ、「事件を決定することのな ヘンリー・ジェイムズの見解の影響を受けていたのかも の小説を読めば分かるように、 自分の信念を取り違えていたこと、そして自分の気 ――をすぐに獲得した。ギッシングがこの能力 知識と経験を会得するという重圧の下で、 ギッシングは心理分析の 道義、 の場合の 社会的行 善意 ح そ 両

なく本質として扱われ、

小説の結末では信条に関わった人物だ

育、 芸術か政治かという問題、 要な同時代の信条 する考えで、その考えは小説全体に現れている。一方、ギッシ 思想の正当性よりも人物の生活に及ぼす思想の影響に関心を抱 証主義者で不可知論者であったこと、そして知的な見解に関わ 出すこと、そしてそれに従って行動することの必要性を感じて 単に反応するだけではない。 である。彼女の場合と同様に、 件などあるだろうか?」と尋ねることによって、 方について小説を通じて実験をしている。 トよりも真剣に受け止め、 ングは人々が主義に従って生活しようとする可能性をエリオ いているからだ。彼女が強調しているのは一般的な人生観に属 たことに帰因するのかもしれない。エリオットの小説では登場 ることこそ道徳的な責任感を表現する最大の方法だと考えてい いる。この類似点は、ギッシングとエリオットが共に熱心な実 説と性格を扱う小説という区別がなされることを拒んでいる。 んでいる。これらの信条はすべて人物の単なる断面としてでは 人物の思想にあまり権威が与えられていないが、それは彼女が い性格など存在するだろうか? とはいえ、ギッシングの手本はやはりジョージ・エリオット 『余計者の女たち』は好戦的なフェミニズム― ―『暁の労働者たち』は実証哲学、そして 人物とその人物が関わる主義との 『民衆』は社会主義、 彼らは首尾一貫した人生論を導き 彼の主要人物は日常的な問題に 性格の具体的説明をしない 彼が描く人物は、 『サーザ』は教 事件を扱う小 と取り組 重

半のユートピア的な憶測、

すなわち、

合理的な社会秩序が確立

解決策を持たない

―に力点を置くことによって、十九世紀後

自身の翻案なのである。

――この領域での邪悪さは明確な

ギッシン

グはこのような個人的な領域

人間性の欠陥に端を発する葛藤に注意を払っていた。

されれば、

おいてでさえ、恋愛における不満、自己欺瞞、 いる場所についてギッシングが抱いた印象を適切に反映したも た。このような最後の数時間における不調和な感じは、 て帰ってくれと懇願したが、彼は今いる場所で死ぬ運命にあっ 知論者であったが、牧師に話しかけた。この聞き手は英国人だ たわって「我慢、我慢(Patience, patience)」と呟いた。 のであろう。彼は、主題として社会の不正を取り上げた小説に H・G・ウェルズが訪ねてきたとき、ギッシングは英国に連れ な村イスプールの言語であるフランス語で話していた。 ったが、 ギッシングは致命的な病にしばらく苦しんだ後、 死に場所となったピレネー山脈の丘陵地域にある辺鄙 孤独、すなわち 死の床に横 彼は不可 友人の 自分の

のである。 ギッシングは文筆活動の初期に、 あらゆる問題が解決するという憶測を攻撃していた ある決定的な真義を発見し

ていた。

るという不変の真理から我々は逃れられない……。 つらいの聖油を魂に塗ったとしても、 世界と言えば邪悪であ 人は、 悪に

> なる。 るのは罪なのだ。 あるべきでない何ものかである。 惑わされたと言うことが事実に反していることに気づくように 悪が自分の存在の本質だからである……。 それが存続することを熱望す 我々の存在は

けではなく、その信条についても審判が下される。

結/すべての被創造物が目指すもの」を反転させたギッシング 掃することによって得られる最終的な勝利を待ち望んでいる。 彼が万物の枠組の中で感じた敵意と人間の醜い自惚れとを表現 あらゆる可能性を否定した。このエッセイの中でギッシングは、 れているが、その中で彼は実証哲学とそれを用いる社会改革の シミズムの希望」という一八八二年に書かれたエッセイに含ま ギッシングがこれを公表することはなかった。この言説は「ペ し、人間性が自ら永続するのを拒み、 人間意識の消滅こそが、テニスンの「一つの遥かなる尊い帰 地球上からその存在を一

説に描いた憤怒、 当世風な形態にすぎないと感じるようになったとき、 筆活動の初期に、社会悪に対抗するために異議申し立てを行 彼の社会批判がそれを最大限に表現しているわけではない。 た。この心情の変化に伴って、ギッシングの特徴である静かで た。しかし、彼が社会悪は人間の置かれた状況に内在する悪の ッシングは、社会悪が矯正されるかもしれないと考えていた文 このような悲観主義がギッシングの小説の核にある。 同情心、 絶望感さえもが不適当なものになっ 初期の ギ

女性の描写を最後に見てみよう。 ミズムから引き出した皮肉な希望を示している。

控えめな語りのスタイルが現れるが、このスタイルは彼がペシ 『ネザー・ワールド』におけるスラム街の一室とそこに住まう 例として、

よりも始末に終えない。そんな類の女だと人は考えるだろう。 言えば取り越し苦労が多すぎて、不幸なときに味方にすると敵 志薄弱で頭もよくないが、 決して言えなかったが、 けて見えた。十九歳で彼女は結婚した。夫のジョン・ヒューイ 合が悪そうに背中を丸めている。二十七歳だが、それよりも老 うにしてあった……。 た炉棚の上には陳腐な装飾があり、 の椅子だけで、 凍らせるような貧困の不快感にあふれている。目につく家具と ットには先妻との間に二人の子供がいた。彼女は魅力的だとは 価値のない絵がそこここに掛けられ、前方にいくらか傾斜し 部屋は散らかっていないし不潔なわけでもないが、 大きなベッド、 椅子の籐製の背は緩んで破れていた。二、三枚 ヒューイット夫人はベッドに腰かけ、 親切で、微笑むと感じがよかった。 洗面台、 気立てはよい。しかし、どちらかと 食事用のテーブルと二、三脚 前に糸を張って落ちないよ 背筋を 意 具 Ļ 家であるために嘆き悲しむことができないのである

にも分からない。 る。 からである。 あった。というのも、 この貧しい女が自分以外の人間をいかにして養うのか、 胸に抱いた赤ん坊は乳を吸う仕草をして呻いて その頬に血の気はなく、 目に輝きがな 第二章 誰

みではなく、作者自身のもっと深い痛みなのだ。 と身体についての戯言は、 怒に満ちた異議申し立てよりも、 落ちないように装飾を留めている一本の糸は、数頁におよぶ憤 もしくはそのうちのどれでもないものを観察されるままに表現 な感じも皮肉な感じもほとんどなしに、 ギッシングは、 具現化する普遍的な状況に気づいているが、リアリズムの小説 いる。この戯言が映し出すのは、その殊更に不幸な人物の苦し いる。スリッパの靴底にたとえられたヒューイット夫人の生命 最終的な判断を読者に任せている。 作為も情け容赦もない突き放した調子で、 苦悩が残酷さを生むことを示唆して はるかに多くのことを語 斜めになった炉棚から 卑劣、不公平、 作者は彼女が 陰険

興味を持っているからではなく、 は彼に合っているという印象が形成される。それは、 支配的になる調子 ふれたことの詳細な注釈や平凡な問題に対処する平凡な人々に に散発的に現れ、『因襲にとらわれない人々』(一八九○年)で ギッシングが、このような調子― -で執筆するとき、やはり小説という形式 小説を書くことが究極的な絶 -早くも『無階級 彼があり の人々』

体とそれを満たす生命の間にも、それと同じ関係があるようで

|部は奇跡的に靴底にくっついているかのようだ。彼女の身

服を着ているというよりも巻きつけていて、薄くなった淡い色

`髪を無造作に巻き上げている。 スリッパを履いているが、

そ

観察する手段であるからだ。それは、 望感に対する防衛策であり、希望という狂気に固執する人々を の表現には適していない耐え難い真実を示唆するのにふさわし のように借用の言語で発せられた借用の感情であって、 フランス語の「我慢、

公 我 (5)一八八二年十月六日にギッシングが弟アルジェノンに宛てた手 たことが分かる。 まれるのを恐れて、 (Letters 2: 102) この実証主義批判のエッセイを発表しなかっ によれば、 彼はフレデリック・ハリソンに読

(6)アルフレッド・テニスン の最終スタンザからの引用 『イン・メモリアム』(一八五〇年

訳

- 1 (2)英国実証哲学協会会長フレデリック・ハリソンを通して知り合 という報告もあったが、生涯ギッシングは神学上の教義に敵対し とはできない。彼が死ぬ前にキリスト教を信奉するようになった った人々が、ギッシングにジャーナリズム関連の仕事を提供して った短信の中で述べている。 たと、ロバーツは一九〇四年一月に『チャーチ・タイムズ』へ送 ギッシングの平和主義にキリスト教の影響があると断言するこ
- (3)ジェイムズは、『カサマシマ公爵夫人』を収録する全集第五巻 に意識しているかということに従って、読者は状況に関心を持つ の序文(一九○八年)の中で、人物が与えられた状況をどのよう して急場を凌ぎながら小説を書き続けた。

くれることもあったが、彼はそのほとんどを受けずに家庭教師と

4) この表現はギッシングの二つの作品で使われている。 ジェイン・スノードンが我慢すれば報われるという場面 と指摘している。 『ネザー・ワールド』の第二十八章で、貧民救済事業の能力がない も う 一 一つは

を慕うバジルに対して友人のマーシャンが忠告する場面

『ヴェラニルダ』の第六章で、ゴート人の王女ヴェラニル

矢 次 綾